台大日本語文研究第 44 期
2022 年 12 月，頁 47-66
2022-09-30 收稿，2022-11-28 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202212_(44).0003

「脫序」－村上春樹〈品川猴的告白〉論－

黃如萍*

摘要

村上春樹短篇集《第一人稱單數》所收錄的作品為〈石枕下〉、〈奶油〉、〈查理帕克演奏巴薩諾瓦（Charlie Parker Plays Bossa Nova）〉、〈與披頭同行（With the Beatles）〉、〈養樂多燕子詩集〉〈謝肉祭 Carnaval〉、〈謝肉祭(Carnaval)〉、〈品川猴的告白〉、同名篇章〈第一人稱單數〉合計八篇精彩短篇作品。

本論之〈品川猴的告白〉，被視為《東京奇譚集》（2005 年 9 月、新潮社）之〈品川猴〉的續篇。〈品川猴的告白〉雖為《第一人稱單數》連作短篇集中之作品，但在研究史上卻沒有相當多的研究文獻出現。研究文獻大多著墨於《第一人稱單數》連作短篇集之全作品為研究對象進行論述。然〈品川猴的告白〉為收錄於連作短篇集中的其中一篇作品，探討連作作品間具有何種關連性的確有其研究意義。但是，連作的八篇作品都各有其不可思議的要素存在，因此，有必要先針對各個作品進行分析探討。

本論文在研究方法上，首先以文本閱讀的方式，精讀這篇作品。將以「脫序」之視點來解構此篇作品的架構。而論證的方式，首先著重「我」所敘事的方式，透過「我」的敘事，解構本作品之整體結構。這樣的觀點來探討，才能找到存在於村上春樹創作方法中的問題。

關鍵詞：「脫序」、村上春樹、「品川猿の告白」、「我」、敘事

* 國立高雄餐旅大學應用日語系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Deviation, Discourse Analysis of Haruki Murakami's Confessions of a Shinagawa Monkey

Huang, Ju-Ping*

Abstract

Haruki Murakami's short story collection, "The First Person Singular," contains eight masterful stories including "On a Stone Pillow," "Cream," "Charlie Parker Plays Bossa Nova," "With the Beatles," "The Yakult Swallows Poetry Collection," "Carnaval," "Confessions of a Shinagawa Monkey," and the stunning title story.

Among these short stores, "Confessions of a Shinagawa Monkey" has been considered as the serial work of "Shinagawa Monkey" in "Five Strange Tales from Tokyo" (September, 2005, Shinchōsha). Although the short story is one of the eight in the collection, yet few has been mentioned in literature review. Most studies focused on discourse on the whole collection. As one of the short stories in the collection, it is meaningful to study relevance of its discourse. On the other hand, eight short stories in the collection have their significance and therefore, there is a need to conduct sperate discourse of each one.

This study first utilize text reading to analyze this short story and then interpret and decompose its structure from the anomie perspective. Arguments on the narration from "I" are made to further decompose the overall structure of the collection to really define issues of Haruki Murakami's writing.

* Associate Professor, Department of Applied Japanese, National Kaohsiung University of Hospitality and Tourism

臺灣大學學術期刊資料庫

Key words: Deviation, Haruki Murakami, Confessions of a Shinagawa Monkey, “I” ,Narration

臺灣大學學術期刊資料庫

〈逸脱〉としての村上春樹「品川猿の告白」論

黄如萍*

要旨

連作短編『一人称単数』に収録の「品川猿の告白」は、雑誌『文學界』(2020 年 2 月号)に掲載されたものが初出で、この他、同短編集の各作品の初出は、「石のまくらに」「クリーム」「チャーリー・パーカー・プレイズ・ボサノヴァ」三つの短編は、『文學界』(2018 年 7 月号)に掲載された『三つの短い話』の「その 1」から「その 3」で構成されているもので、「ヤクルト・スワローズ詩集」は『文學界』2019 年 8 月号の「その 5」、「謝肉祭 (Carnaval)」は同 12 月号の「その 6」同となる。また、本論の主題となる「品川猿の告白」は、そのタイトルから、『東京奇譚集』(2005 年 9 月、新潮社)に収められた「品川猿」の続編だと見なされる。

こうした背景を持つ「品川猿の告白」であるが、研究史で数多く論じられてきてはいない。ただ、短編集『一人称単数』を対象とした数少ない先行研究においても、全作品を対象に論じられるものが見られる。無論、連作短編集『一人称単数』の中の一つとして書かれている「品川猿の告白」を、他の収録作品との関連に着目しての究明に意義があると思われる。さらに、前作の「品川猿」とのつながりも、重要視すべきであろう。その上で、連作短編集『一人称単数』にある八つの短編作品、あるいは前作の「品川猿」には、それぞれに、不思議な要素が込められており、個々の作品を論じることにも十分に意義があると思われる。

こうした点を踏まえ、本論は、〈逸脱〉という視座をもって、「品川猿の告白」を独立した作品として分析するもので、その論証方法

* 国立高雄餐旅大学応用日本語学科准教授

臺灣大學學術期刊資料庫

として、まず、「僕」による話の構造に着目し、「品川猿の告白」の仕組みを捉え直すことを試みる。

キーワード：〈逸脱〉、村上春樹、「品川猿の告白」、「僕」、語り

臺灣大學學術期刊資料庫

〈逸脱〉としての村上春樹「品川猿の告白」論

黄如萍

一、はじめに

村上春樹の短編集『一人称単数』(2020 年 7 月、文藝春秋社)に収録された作品は、「石のまくらに」「クリーム」「チャーリー・パーカー・プレイズ・ボサノヴァ」「ウィズ・ザ・ビートルズ With the Beatles」「『ヤクルト・スワローズ詩集』」「謝肉祭(Carnaval)」「品川猿の告白」「一人称単数」(書き下ろし)の計八作品である。

また、短編集『一人称単数』の各作品の初出は、「石のまくらに」「クリーム」「チャーリー・パーカー・プレイズ・ボサノヴァ」三つの短編は、『文學界』(2018 年 7 月号)に掲載された『三つの短い話』の「その 1」から「その 3」で構成されているもので、「ヤクルト・スワローズ詩集」は『文學界』2019 年 8 月号の「その 5」、「謝肉祭(Carnaval)」は同 12 月号の「その 6」、「品川猿の告白」は同 2020 年 2 月号の「その 7」となる。

そして、本論の主題となる「品川猿の告白」は、そのタイトルから、『東京奇譚集』(2005 年 9 月、新潮社)に収められた「品川猿」の続編だと見なされ、その梗概は次のものとなる。

語り手である「僕」は、ある日、無計画に行った群馬県の温泉宿で、一匹の猿と出会う。猿は、この温泉宿で働いており、自分のことを「品川猿」と紹介する。そして、「僕」は、品川猿の告白—女性の名前を盗むこと—に耳を澄ませる。

なお、本作に対し、前作の「品川猿」は、名前を盗まれた女性の不安や悩みが語られている。つまり、主人公の安藤みずき(結婚前の名前は「大沢みずき」)が、一年ほど前から、時々、自分の名前が思い出せなくなったことから、カウンセラーの面談を受け、その過程で、「名前に関連して思い出せる」エピソードを思い出す、という内容である。

臺灣大學學術期刊資料庫

こうした背景を持つ「品川猿の告白」であるが、研究史で数多く論じられてきてはいない。ただ、その数少ない研究において、沼野充義は「七番目の「品川猿の告白」は、これまでの六作とは明らかに違って、非現実的な空想の要素が強い、ファンタジー的作品になっている。前六作の場合、合理的に説明できない謎めいたことが起こるのも稀ではないが、そういった謎を内包しながらもいちおう「リアリズム小説」の枠内に収まっている」[1]と捉えている。また、田中実は「『一人称単数』に収められた八つの短編は、それぞれ意識的・意図的に作家村上春樹の事実に戦略的に重ねられて一見私小説風に仕立て上げられています。しかし、私小説概念の基底にあるリアリズムの問題自体が原理的に相対化されていて、これをこの表題作は克服すべく総括してい」[2]ると指摘している。しかしながら、これらの論はいずれも、『一人称単数』という連作短編集に収録された作品と「品川猿の告白」との関連性や対照性について論じられるものである。無論、連作短編集『一人称単数』の中の一作品として書かれている「品川猿の告白」を、他の収録作品との関連に究明に意義があると思われる。さらに、前作の「品川猿」とのつながりも、重要視すべきであろう[3]。その上で、連作短編集『一人称単数』にある八つの短編作品、あるいは前作の「品川猿」には、それぞれに、作品における個性や不思議な要素が込められており、村上春樹本来の持ち味を読者に感じさせる作品として、成立していると言え、その点において、個々の作品を論じることも十分に意義があると思われる。

一方、沼野充義は「品川猿の告白」を「人間の言葉を完璧に話す

---

1 沼野充義(2020)「偶然に織り成された唯一の「私」―村上春樹『一人称単数』における回想と虚構の交錯」『文學界』文藝春秋社、p191

2 田中実(2021)「無意識に眠る罪悪感を原点にした三つの物語―〈第三項〉論で読む村上春樹の『猫を棄てる　父親について語るとき』と『一人称単数』、あまんきみこの童話『あるひあるとき』―」『都留文科大学大学院紀要』都留文科大学大学院文学研究科広報紀要委員会、p21

3 葉麦(2021)「村上春樹文学における日常生活からの逸脱―「品川猿」と「品川猿の告白」との比較を中心に―」『村上春樹研究叢書』淡江大学出版センター、p75-p100、拙論(2021)「村上春樹「品川猿」論―〈紐帯〉としての「品川猿の告白」」『2022年第11回村上春樹国際シンポジウム予稿集』淡江大学村上春樹研究センター、p148-p155

臺灣大學博碩士論文

猿を主人公とした物語」[4]と指摘しており、こうした点において、同作に登場する猿は、明らかに一般動物の範疇から外れていると考えられよう。こうした点を踏まえ、本作をより多様な観点から把握するにおいて、本論は、〈逸脱〉という視座をもって、「品川猿の告白」を独立した作品として分析するもので、その論証方法として、まず、「僕」による話の構造に着目し、「品川猿の告白」の仕組みを捉え直すことを試みる。

二、「僕」の話の意図

「品川猿の告白」は、過去に体験した奇妙な出来事を、「僕」が述べるといった形式で構成されている小説である。本節は、こうした「僕」の話の内容における、注意すべき点について述べたい。まず、本作の冒頭は、「僕がその年老いた猿に出会ったのは、群馬県 M＊温泉のとある小さな旅館だった。五年ばかり前のことだ」（論者注、下線は全て論者によるものである。また、／は改行を示す）(p10)のような語りから始まり、非日常的で寓話的な展開が期待される。

そして、それに至る過程についても、「その鄙びた、というか老朽化してほとんど傾きかけた旅館に宿泊したのは、たまたまの成り行きによるものだった」(p10)「僕は思いつくまま行き当たりばったりの一人旅を続けていたのだが」(p10)「温泉町の中心部を歩いて適当な宿を探したのだが、まともな宿屋で、夕食の時刻が過ぎたあとに宿泊客をとってくれるところは、なかなか見つからなかった」(p10)のように、その偶然性が繰り返し強調されているのである。

一方で、「「木賃宿」という由緒ある表現がいかにも似合いそうな、寂寥感溢れる宿泊施設だった。かなりの年代を経た建物だが。ただ古びているというだけで、古風な趣のようなものはどこにも見当たらない。あちこちの建て付けが微妙に歪んでいるようにも見えた」(p10)「その宿では、あらゆるものが年老いて古び、劣化している

[4] 注 1 を参照（p191）。

臺灣大學學術期刊資料庫

ようだった。／案内された部屋は布団部屋のように狭く、天井の明かりは暗く、畳の床は歩くたびにみしみしと不吉な音を立てて軋んだ。でも今さら贅沢は言えない」（p11）「僕の他には入浴客もおらず（宿泊客が他にいるのかどうかさえわからない）」（p11）などの波線部のように、その「建物や設備の貧相さ」が強調されているのである。また同時に「不吉な音」（p11）「次の地震を持ちこたえるのは、あるいはむずかしいかもしれない。今日明日のうちに大きな地震が起こらないことを、ただ願うしかならない」（p10）などの描写に、「僕」の不安感や恐怖感の増大も示されている。さらに、二重線部のように、「今さら贅沢は言えない」「決してうまい蕎麦ではなかったし、だし汁も生ぬるかったが、これもまあ贅沢は言えない」（p11）のように、こうした心境に陥るまでの経緯が詳細に説明されている。

そして、こうした描写は、冒頭にある「その年老いた猿に出会った」という謎の「猿」が出現、つまり、現実世界が、徐々に神秘の世界へと変わるという兆候を、事前に読者らに読み取らせる役割を担っているものと考えられる。

では、そもそも、「僕」の話の意図は何であろうかを考えたい。

> そんな話をしても、きっと誰も信じてくれないだろうと思ったからだ。たぶん「それ、また話をつくっているでしょう」と言われるのがおちだ。文章にしなかったのは、いったいどのような形式でそれを語ればいいのか、見当もつかなかったから。事実として書くにはあまりに突飛すぎて、具体的証拠を――つまりその猿の実物を――差し出さない限り、誰もそんな話を信じてはくれないだろうかといってフィクションとして書くには、話の焦点と結論が今ひとつ明確ではない。（p26）

上掲の描写のように、「僕」は本来、話を信じてくれる人がいないであろうと考え、この出来事を文章にすることをやめたのである。つまり、読者が信じるか否か、また「そんな話のどこにテーマがあり、教訓があるだろう？」（p26）のように、話のテーマと教訓性を重視していることが語られている。

臺灣人學學術期刊資料庫

だが、「それから五年が経過した今」「そのときノートブックに書き残した覚え書きを元に、こうして品川猿の話を書き起こしているのは、つい最近いささか気がかりな出来事に遭遇した」（p27）ために、「僕」は、当時のことを書くことにしたのである。つまり、「僕」は、「今」の時間指標に基づき自らの過去を顧みることで、当時の出来事を語る現在の「僕」が、語ろうとする過去の事象を整序し、自らの内面を構築していっていることが分かる。

つまり、同作は、冒頭から寓話的な展開を示しつつ、さらに、これからの話は信じがたい話だと、一種の〈暗示〉を事前に掛けているように見える。しかし、それでもやはり信じてほしいという意図も同時に込められているように思える。言い換えれば、「僕」は読者に、「僕」の書いた〈猿の人生〉を読み進ませていくうちに、「猿」の存在を信じながら読むことを促す仕組みになっているのである。

三、「僕」の話の方向性

（一）現実性と合理性

同作における「僕」の話には、いくつかの特徴が示されている。まず、記述の一つの特徴としては、「お湯」「湯気」への繰り返しが見られることを挙げたい。例えば、「濃いお湯のせいで頭がかなりぼんやりしていたこともあるし、だいたい猿が口をきくなんて考えもしないから、その姿かたちとそれが猿という動物であるという認識が、急にはうまくひとつに重ならなかったのだ」(p12)や、「湯気の向こうにある猿の姿をしばらく眺めていた」（p12）、さらに、「僕の声は湯気の中でこんもりと柔らかく響いた。その響きには何かしら神話的な趣さえ聞き取れた。それは自分の声のようには聞こえなかった」（p12）など、何回も繰り返されており、これにより、非現実的な世界を強調している様子が感じられる。

ただ、このような非現実的な世界に直面したことに対し、「そのこだまは……いや、ちょっと待ってくれ、どうして猿がこんなところにいて、人間の言葉を話しているんだ？」（p12）「濃いお湯のせいで

臺灣大學圖書館期刊資料庫

頭がかなりぼんやりしていたこともあるし、だいたい猿が口をきくなんて考えもしないから、その姿かたちとそれが猿という動物であるという認識が、急にはうまくひとつに重ならなかったのだ」（p 12）と、その事実を受け入れられず、混乱していることを、以下のように詳細に説明している。

「どうして猿がこんなところにいて、人間の言葉を話しているんだ？」（p12）「「君は人間の言葉がしゃべれるんだ？」／「はい」と猿ははきはきと答えた。たぶんいろんな人から同じ質問を受けるのだろう。／「小さい頃から人間に飼われておりまして」」（p13）などのように、人間世界との距離を意味していることがうかがえる。それと同時に「猿」が話す「人間の言葉」によって、まさに人間世界との懸隔を読者に意識させるよう仕向けているようだ。

また、その表現の多様さに、「僕」の混乱がしばらく続く様子が描かれている一方で、「猿が笑うのを目にするのは、それが生まれて初めてだった。でも猿だってやはり笑いもすれば、泣きもするのだろう。なにしろ言葉がしゃべれるくらいだから」（p16）や「猿と並んで座って、一緒にビールを飲むというのも、正直言ってなんてなんだか奇妙なものだが、でもたぶんそういうのも慣れの問題なのだろう」（p17）などのように、非現実的な世界にいながらも、「僕」が、それを「現実」的な出来事として受け入れようとしている様子もうかがえる。

そして、そもそも寓話的な展開のはずだった同作だが、現実性、あるいは合理性を重視した説明をしている箇所が見られる。例えば、「品川猿」が「人間の女性にしか恋情を抱けない体質になってしまっていた」ことを告白した際に、「僕」は「それは現実的に、いささか困ることになるかもしれないね」と言った点である。「猿」は「僕」の返答に対し、「はい、それは現実的にとても困ります」（p19）と答えているのである。また、「僕」は翌朝の思いとして、昨夜に「猿」の身の上話を聞いたことについて、「また意識が少し混乱した。現実と非現実があちこちでたらめに位置を交換するような感触があっ

臺灣人文學術期刊資料庫

た」（p24）と表している。そして、「僕はそのあいだに頭の内部を懸命に合理化し、整理していた。品川育ちの猿？御殿山庭園？いくらなんでも、猿がこんなに流暢に言葉を覚えられるものだろうか？しかしそれはどう見ても猿だった。姿かたち、猿以外の何ものでもない」（p14）のように、直面している場面が合理的か否かを考えようとする様子も語られている。つまり、後年に想起するにおいて、その出来事の合理性というものを考慮に入れて語られるのである。このように、同作は、その冒頭から、寓意的な展開を読者に印象づけようとする一方で、同時に、現実性、あるいは合理性も考慮されているのである。

（二）「普通」からの〈逸脱〉―〈笑い〉を喚起されること

また、「僕」の話の特徴として、「普通」や「通常」という言葉が頻出することも留意したい。

「しゃべり方にも癖がなく、目を閉じて聞いていたら、人が普通に話しているとしか思えない。「ありがとう」と僕は言った」（p12）「猿は服を着ていなかった。もちろん猿は通常服を着ていない」（p13）「普通のお客さんは猿がお茶なんか持ってきたら、そりゃ驚きますので。また調理場なんかだと、食品衛生法なんかにもひっかかりますでしょうし」(p15)などのように、「僕」と猿とが、それぞれ「普通」「通常」の価値観を提示していることが分かる。そして、「僕」が頻発する「普通」や「通常」という言葉から、語っていることそのものが、どれほど「普通」「通常」ではないのかを説明し続けているのである。

さらに、その「普通」からの〈逸脱〉により、以下のような、「滑稽」さを醸し出してもいる。

> ・「小さい頃から人間に飼われておりまして、そのうちに言葉も覚えてしまいました。かなり長く、東京の品川区で暮らしておりました」／「品川区のどのあたり？」／「御殿山のあたりです」／「いいところだね」／「はい、ご存じのようにずいぶん住みやすいところであります。近くに御殿山庭園な

臺灣大學學術期刊資料庫

んかもございまして、自然に親しむこともできました」(p13)

・「ブルックナーが好き？」／「はい、七番が好きです。とりわけ三楽章にはいつも勇気づけられます」／「僕は九番をよく聴くけど」、それもあまり意味のない発言だ。／「はい、あれも実に美しい音楽です」と猿は言った。(p14)

「僕」の「猿なのに」という思いと、傍線部の「猿」の答えとの間には、ギャップがある。つまり、我々が一般的に認識する猿の姿とは違い、森ではなく、東京都の品川区、しかも御殿山という高級住宅地に住んでいたという、いわば、常軌を逸した「猿」の像がそこにある、といったことが読み取れる。また、猿だからこそ、自然に親しみを持つのは当然のことであろうと考えられるが、それさえも「御殿山庭園」という観光名所なのである。さらに、自然に親しむはずの「猿なのに」音楽が好きで、しかも、「僕」との会話のやりとりから、「ブルックナー」が好きで、精通していることが推測できる。

一方で、「御殿山」「御殿山庭園」「ブルックナー」について、特別な注釈や説明はない。つまり、「僕」は、東京や音楽について、相応の知識を持つと想定されることを読者に示している。また、ここには、一般的な猿像との差異も含まれている。つまり、作品に登場する「猿」が住んでいたとするところが、高級住宅地であるということが理解できる者だけが、この猿が一般的な猿像と異なる姿を持つといった滑稽さを理解することができるのである。そして、同作には、一般的な猿像とは異なる「猿」が描かれているという、そのイメージのギャップから〈笑い〉が喚起されるのである。

さらに、一般的な猿像から〈逸脱〉した「猿」は、働いているというのである。しかも、働くことについて、「普通のお客さんは猿がお茶なんか持ってきたら、そりゃ驚きますので。また調理場なんかだと、食品衛生法なんかにもひっかかりますでしょうし」(p15)と「猿なのに」、働いているだけではなく、「食品衛生法」まで考えているのだといった「滑稽」さも漂わせている。

臺灣大學學術期刊資料庫

この他、前述の「猿は服を着ていなかった。もちろん猿は通常服を着ていない」（p13）という「僕」の語りと、「猿は今では服を着ていた。＜I ♥ NY＞とプリントされた厚手の長袖シャツに、グレーのジャージのトレーニング·パンツというかっこうだった」（p17）という設定も、そのギャップに面白さを感じられる。しかも、猿と部屋で酒を飲むにおいて、単に服を着ているというだけでなく、それが「＜I ♥ NY＞」のシャツであるというところにも、「滑稽」さがあり、〈笑い〉を呼び起こされるのである。

そして、「猿なのに」、人間のような振る舞いをしたり、反応を期待したりする以下のような場面もある。

·「承知しました。よく冷えたビールをお持ちいたします。銘柄はサッポロでよろしいでしょうか？」（p16）

·「僕は猿の顔を注意してみていたのだが、もともと赤い顔色がそれ以上赤くなるようなことはなかった。アルコールに強い猿なのかもしれない。それとも猿の場合、酔いは顔に出ないのかもしれない」（p18-p19）

上掲の描写にも、一般的な猿像とのギャップが見られる。また、「猿なのに、雌の猿が相手では性欲がそそられなかった？」（p19）も同様である。なぜなら、一般的な猿であれば、性の対象は「雌の猿」であろうからである。

そもそも、同作は、全体的に対比による描写が多い。例えば、最初から「建物や設備の貧相さに比べると、温泉は思いのほか素晴らしかった」（p11）など、その対比を通じて、意外性を際立たせようとしているのである。一方で、以下のように、「猿」が示したギャップに、面白さを感じている僕の姿もある。

「しかしなんだかおかしなものですね。こんな山の中にあるのに『荒磯の間』なんてね。ふふふ」と言って猿はおかしそうに笑った。猿が笑うのを目にするのは、それが生まれて初めてだった。でも猿だってやはり笑いもすれば、泣きもするのだろう。なにしろ言葉がしゃべれるくらいだから。（p16）

臺灣大學學術期刊資料庫

また、「僕」も「猿」の意見に「(猿が言ったようにどうして「荒磯の間」なんて名前がついているのか、僕にもさっぱりわけがわからなかった。それは本当に物置に近いような貧相な部屋で、荒磯と結びつくような要素は皆無だったから)」(p16)と同意している。そして、「山の中にあるのに『荒磯の間』」なのかという対比によって、面白さと同時に意外性も強調されているのである。

なお、「品川猿の告白」の読者は、「僕」の話の聞き手という立場を用意されている。つまり、「僕」と同じように、「猿」を見つめることができる立場である。そのため、読者は、このような突飛な設定を受け入れつつ、同作のこうした場面に漂っている不可思議さといった<逸脱>を感じることができるのである。一方、読者は、「僕」自身ではなく、客観的な立場で物語を俯瞰することもできる。そして、そうした視点から「猿」と「僕」とのこうしたやりとりを見れば、そこに、一般的な猿とのギャップである<逸脱>とそこにあるユーモアを見ることもできよう。

以上のように、「僕」がこのように執拗に認識のギャップを強調するのは、これから語る話が、一般的で普遍的な認識での猿とは大きく異なるということを、「僕」自身が意識しているためだと言えよう。そしてここには、一般的に存在する猿と異なる、〈逸脱〉した存在と見なそうとする「僕」の意図が働いているように思える。つまり、登場する「猿」は、一般的に認識されている「モンキーの猿」「実物の生きた猿」(p30)というものではなく、秩序から外れた「猿」、言い換えれば「はぐれ猿」(p18)として構築されているのである。そして、「僕」の語りは、一般的であったり、普遍的であったりといった、「普通」とは異なる認識であることを認めることで成立しているのである。

四、「猿」の告白—「名前盗み」

「猿」は「名前というほどのものは持ち合わせませんが、みなさんに品川猿と呼ばれております」(p16)と、自身には「名前という

臺灣人學學術期刊資料庫

ほどのもの」がないとしている。一方、好きな女性の名前を盗んでいたことを「僕」に告白した。そして、「わけあってあるとき、品川から力尽くで放逐されまして、高崎山に放たれました。最初はそこで心穏やかに暮らせそうに見えたのですが、でも結局はうまく運びませんでした」（p18-p19）の語りに、前作の「品川猿」を思い起こさせる。前作において「猿」は、女性の名前を盗むという罪を犯し、警察に逮捕され、品川から放逐されたのである。ただ、「これまでに手に入れた七人の女性のお名前を、心の中で大事にまもりながり穏やかな日々を送っております」（p22）との語りから、品川から放逐された後に「悪癖を再開」（p31）しているもようで、言い換えれば再犯したと考えられる。だが、「猿」は「その盗みが法律には抵触」（p31）し、法律から〈逸脱〉した犯罪行為であることを知りながら、以下のように、「僕」に向けて、淡々と愛に関して意見を述べている。

・「肉体的な行為は抜きにして？」／猿は強く肯いた。「はい、私はあくまで猿ですが、決して下品な真似はいたしません。愛する女性の名前を自分のものにする――それだけで十分なのです。それはたしかに性的な悪行ではありますが、また同時にどこまでも清くプラトニックな行為でもあるのです。私は心の中にあるその名前を、ただひっそりと一人愛でるだけです」（p22）

・「私は考えるのですが、愛というのは、我々がこうして生き続けていくために欠かすことのできない燃料であります。その愛はいつか終わるかもしれません。あるいはうまく結実しないかもしれません。しかしたとえ愛は消えても、愛がかなわなくても、自分が誰かを愛した、誰かに恋したという記憶をそのまま抱き続けることはできます。（略）私はこうしてこの心に（と言って猿は自分の毛だらけの胸に手のひらをあてた）、かつて恋した七人の美しい女性のお名前を大事に蓄えております。私はこれを自分なりのささやかな燃料とし、寒い夜にはそれで細々と身を温めつつ、残りの人生をなんとか生き延びていく所存です」（p23）

臺灣大學學術期刊資料庫

繰り返しになるが、「猿」は、罪を犯しているにも関わらず、「究極の恋愛」を淡々と語っている。これを、冷静に捉えれば、不可解さや、一種の滑稽さを覚えるのが当然とも思われよう。だが、それを聞いた「僕」は、「品川猿が作り話を語ったとはどうしても思えなかった。彼の目つきや表情、時折考え込む様子、ちょっとした間の取り方、様々な仕草、言葉のつっかえ方、どれをとってもきわめて自然だったし、そこに作り物らしき要素はまるで見受けられなかった。そして何より僕はその猿の告白の、痛々しいまでの正直さを認めてやりたかった」（p26）と、信じようとしたのである。しかし、「五年が経過した今」、「僕」の知人である女性編集者が自身の名前を忘れたという出来事に遭遇し、「猿」の再犯の可能性に思い至ったのである。ただ、「僕」は「品川猿が再び「名前盗み」を開始したとは、僕は思いたくなかった。七人の女性たちの名前を心に蓄えているだけでもう十分だ」（p30）と、「猿」のことを信じることにした。しかしながら、実際、品川から放逐されてから、既に七人の女性の名前を盗んだという猿の証言を忘れることはできなかろう。

五、おわりに

以上から見れば、同作では、「猿」について、一般的な認識と物語の設定とに、大きなギャップがある。ただこれは、「品川猿の告白」の基本的な設定が、ユーモアそのものに力点を置いて描かれている作品として姿勢の表れだといえよう。しかし、ユーモアを内在した作品でありながら、一方で、その背後に本当の主題を隠していると考えられるのである。

作品は、その全体として、人間社会の孤独が間接的に語られていると言えよう。また、前述したように、前作「品川猿」では、名前を盗まれた女性の不安と悩みが主題になっているのに対し、本作「品川猿の告白」では主に、「猿」の悩みが語られている。そして、なぜ、女性の名前を盗まなければならないのかという点においても、それが、「猿」自身の「アイデンティティー」の問題とも関わっていると

臺灣大學學術期刊資料庫

している。つまり、女性の名前を盗むことにより、その女性が「アイデンティティーの危機」（p20）に陥ってしまうのと同様に、猿自身も「私は猿社会に属せず、人間社会にも属せない、どっちつかずの半端で孤独な猿に成り果ててしまった」（p18）と、「アイデンティティーの危機」に遭遇しているのである。しかし、「名前盗み」の犯罪行為では、「アイデンティティーの危機」を解消するに至ることはなく、ここに、同作の風刺めいた意味が込められているように思える。そして、「猿」が語る「究極の恋愛」は「同時に究極の孤独」（p22）でもあるとも思えるのである。

なお、「名前を盗む」ことに関連する「アイデンティティー」といった問題に関して言えば、村上春樹の他の作品、例えば短編集『女のいない男たち』（2014 年 4 月、文藝春秋社）に収録された「シェエラザード」という作品が想起されよう。これは、「羽原はその女」の名前を知らないが、勝手に「シェエラザードと名付けた」[5]といったものである。もっとも、「シェエラザード」は、「名前を盗む」というものではない。一方、「品川猿の告白」では、「名前というほどのものは持ち合わせませんが、みなさんに品川猿と呼ばれております」（p16）との語りがあり、こうした語りは、夏目漱石の作品『吾輩は猫である』（『ホトトギス』1905 年 1 月～1906 年 8 月）の有名な冒頭文である「吾輩（わがはい）は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたかとんと見当がつかぬ」を想起できる。さらに、『吾輩は猫である』の「猫」が、中学校の英語教師である珍野苦沙弥の家に飼われているのに対し、「品川猿の告白」の「猿」は「ご主人は大学の先生でした。物理学が専門でして、学芸大学で教鞭をとっておられました」（p14）「大学教授夫婦に育てられたものですから」（p18）と、両作品に登場する「猫」と「猿」とのいずれもが、いわゆる「インテリ」（p14）に育てられているのである。そして、『吾輩は猫である』も、人間模様が風刺的に描かれている作品であり、これらの対照については、

[5] 拙論（2016）「〈摂取〉の方法―村上春樹「シェエラザード」論」『解釈』解釈学会、p20-p30

臺灣大學學術期刊資料庫

紙幅の関係もあり、今後の課題として別稿に譲るものとしたい。

【付記】本稿は、「2021 年第 10 回村上春樹国際シンポジウム」での発表に加筆・修正を加えたものである。貴重なご意見をくださった皆様に深く感謝申し上げる。なお、本稿は台湾・科技部（MOST 109-2410-H-328-003-）研究助成の成果である。さらに、本稿を草するにあたって、審査委員の貴重なご意見をいただいたことに、心より厚く御礼を申し上げる。

【テキスト】

本文の引用はそれぞれ『一人称単数』（2020 年 7 月、文藝春秋社）、『女のいない男たち』（2014 年 4 月、文藝春秋社）、『漱石全集』（1994 年 9 月、岩波書店）に拠った。

【参考文献】

山根明敏（2021）「村上春樹『一人称単数』と私小説との距離―「クリーム」「ウィズ・ザ・ビートルズ」「ヤクルト・スワローズ詩集」「一人称単数」を読む」『Mukogawa Literary Review』武庫川女子大学英文学会

田中実（2021）「無意識に眠る罪悪感を原点にした三つの物語―〈第三項〉論で読む村上春樹の『猫を棄てる　父親について語るとき』と『一人称単数』、あまんきみこの童話『あるひあるとき』―」『都留文科大学大学院紀要』都留文科大学大学院文学研究科広報紀要委員会

葉麥（2021）「村上春樹文学における日常生活からの逸脱―「品川猿」と「品川猿の告白」との比較を中心に―」『村上春樹研究叢書　村上春樹における逸脱』淡江大学出版センター

沼野充義（2021）「偶然に織り成す運命の物語―村上春樹『一人称単数』『猫を棄てる』における回想と虚構」『村上春樹研究叢書　村

臺灣大學圖書館期刊資料庫

上春樹における運命』淡江大学出版センター
沼野充義（2020）「偶然に織り成された唯一の「私」―村上春樹『一人称単数』における回想と虚構の交錯」『文學界』文藝春秋社
黄如萍（2016）「〈摂取〉の方法―村上春樹「シェエラザード」論」『解釈』解釈学会

臺灣大學學術期刊資料庫